



Title	綴プロジェクト【風神雷神図屏風】について
Author(s)	輿石, まおり
Citation	デザイン理論. 2012, 60, p. 33-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53573">https://doi.org/10.18910/53573</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 綴プロジェクト [風神雷神図屏風]について

輿 石 まおり

## キーワード

綴プロジェクト, 風神雷神図屏風, 原寸大複製品, デジタルアーカイヴ, 文化保存

Tsuzuri Project, Fu-jin Rai-jin Zu Byo-bu, Full-size Reproduction, Digital Archive, Cultural Preservation

## はじめに

1. 背景

2. [風神雷神図屏風]

A. 製作

B. 展示

a. 〈次世代への文化継承〉

b. 洞爺湖サミット

おわりに

## はじめに

唯一無二の存在である芸術作品（以下、原品、とする）の多くは未来に継承すべき人類共有の貴重な財産、文化遺産と目されている。原品の鑑賞は人生を豊かにすると推奨されるが、世界各地に点在する原品を直に鑑賞することは距離的、時間的、経済的等理由から多くの人々にとって日常茶飯ではない。加えて、原品の保存、保管、保護等のため原品と人々が直に接する機会には数々の制限、制約が設けられている<sup>1</sup>。こうした現実を補うべく原品の存在を知らせ、その片鱗を伝える方法として最も用いられてきたものが原品を撮影し、その全体または部分を原寸大若しくは縮小拡大し写真図版として使用した画集、美術書、雑誌またはポスター等の印刷物<sup>2</sup>である。これら量産を特徴とする印刷物は原品に係る情報を保存、保管、共有する手段、アーカイヴ（archive）の機能と役割を担うものもある。

情報の保存、保管、共有により人類の文化遺産を未来に継承することがアーカイヴであり、アーカイヴにおける情報の正統性は、それと対応する唯一無二である原品の存在に保証されている。the United Nations Educational Scientific and Cultural Organization（略称：UNESCO。以下では、UNESCO、とする）の世界遺産（有形文化遺産）認定基準に確認できるように原品に真実性（authenticity）及び完全性（integrity）を置く観点<sup>3</sup>から従来の保存、保管、継承とは、各文化圏において原品の修復技術が発達し確立されていることもあり<sup>4</sup>、後

世の修復また時間及び環境からの影響（損傷、劣化、汚垢等）を含めた原品総体の現状維持を主眼とする。

原品が今まで保存、保管、継承してきた第一義の所以と存在価値は作家の創造（例：描画の視覚的情報）が人々に与える感動である。作家が完成と見なし筆をおいた原品誕生時の状態、後世の修復また時間及び環境からの影響（損傷、劣化、汚垢等）等皮膜下にある原品の元の視覚的情報、用いられた技法、技術、素材の解明は原品に係る多くの研究の原点であり、原品の保存、保管、修復に対処し根本的な対策を講じるために必要不可欠だ。しかし原品総体の現状維持を第一義とする従来の保存、保管、継承に係る方針が壁となり、原品に関して様々な専門分野（例：美術史、分析化学、修復、復元）が研究を重ねてきたにもかかわらず多くの原品の、基本の姿が客観的、科学的に解明されずにいる<sup>5</sup>。

そうしたなか20世紀後半から顕著となる高度情報通信ネットワーク（Information Technology. 以下では、IT、とする）社会の地球規模での構築を背景にアーカイブの技術面、特に最先端であるデジタル技術の存在を強調したデジタルアーカイブ（Digital Archive）という用語が誕生<sup>6</sup>し、「文化財や歴史遺産など先人が生み出した有形無形の創造物をデジタル化し、またデジタル製作物を保存活用して、新たな文化や知識の生成に役立てたい<sup>7</sup>」とするデジタルアーカイブ構想が動き出す。その一つが2007年3月5日に発足した、特定非営利活動法人京都文化協会（旧財団法人京都国際文化交流財団。2008年12月24日をもって組織名及び事務所の住所等連絡先を変更。以下では、京都文化協会、とする）が主催しキヤノン株式会社が協賛する文化財未来継承プロジェクト（別称綴プロジェクト。以下では、綴プロジェクト、とする）である。

綴プロジェクトとは2007年3月12日から2010年2月28日までの3年間に国内外の日本の文化遺産（屏風、襖絵、掛け軸、絵巻物等。以下では、伝統的な日本画、とする）から重要度、希少性を念頭に15点以上を選択し、デジタル技術を駆使した高精細複製品の製作を含め、デジタルアーカイブを構築、展開するものだ。綴プロジェクトの第一の特徴はデジタル化情報から著作権、所有権、肖像権等の権利問題及び契約問題を解決した合法的な、工業的過程に加え日本の伝統工芸を受け継ぐ京都の職人が原品と共に仕上げを施した原寸大複製品を製作し、原品に代わり一般に展示するというコンテンツ活用法<sup>7</sup>である。綴プロジェクトの原寸大複製品は、その合法性及び公的性が示すように贋作<sup>8</sup>に分類されるものではない。

綴プロジェクトに代表されるデジタル複製品については、原品に換えて展示鑑賞に具する一方原品は保存、保管に徹するコンテンツ活用法が取り上げられ議論が展開されている<sup>9</sup>。しかしこれは原品の模造品（含模写）の是非を問う従来の議論の延長であり、背景を新たにする綴プロジェクトの原寸大複製品のアーカイブとしての可能性、独特の役割は、現在までのところ、

明らかにされていない。

本稿では綴プロジェクトを代表する作品、俵屋宗達（生没年不詳）《風神雷神図屏風》（17世紀、紙本金地著色、二曲一隻、169.8×154.5cm、国宝、京都、建仁寺所蔵。図1）を原品とする「風神雷神図屏風」（初公開2006年10月31日、京都、建仁寺。同年月日は作品完成期日でもある<sup>10</sup>。原品との区別のため以下では〔 〕付で示す。図2）を検証、考察し、綴プロジェクトの原寸大複製品の、原品の保存、保管、継承に係るアーカイブとしての可能性、独特の役割を示したい。

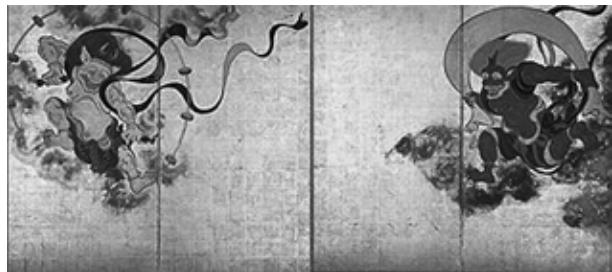


図1 《風神雷神図屏風》



図2 「風神雷神図屏風」

## 1. 背 景

綴プロジェクトの背景には、20世紀後半から顕著となるIT社会の地球規模での構築及びデジタルアーカイブ構想の実施がある<sup>11</sup>。そこで以下では、IT社会及びデジタルアーカイブについて日本の動きを見ておこう。

IT社会とは「インターネットその他の高度情報通信ネットワークを通じて自由かつ安全に多様な情報又は知識を世界的規模で入手し、共有し、又は発信することにより、あらゆる分野における創造的かつ活力ある発展が可能となる社会をいう<sup>12</sup>。」IT社会は例えば大学学部、研究科におけるITを活用した遠隔教育の実施、大学の公開講座の全国配信等に見るように従来の書面主義、対面主義からの脱却を特徴とする。

IT社会を日本国内に構築するとともに、IT社会に関する国際的な取り組みに協力するために、1994年8月2日に高度情報通信社会推進本部が日本内閣に設置される。2000年11月27日に『IT基本戦略』が決定され、その2日後に『IT社会形成基本法』が成立する。日本政府は、5年以内に世界最先端のIT国家となることを目標とした『e-Japan戦略』（2001年1月22日決定）を始まりに、今までのところ年数回の割合で現行の施策の見直し及び新たな施策の策定を実施し、IT政策の推進に努めている<sup>13</sup>。

『IT 基本戦略』には目指すべき IT 社会像が掲げられているが、その一つに「芸術・科学：あらゆる美術作品、文学作品、科学技術を地理的な制限なく、どこにいても鑑賞、利用できる。また、人々がデジタルコンテンツ（\*2）を容易に作成し、流通させることができる<sup>14</sup>。」という項目がある。同内容に関しては2003年7月2日『e-Japan 戦略Ⅱ』に明記され、同年8月8日『e-Japan 重点計画－2003』においてデジタルアーカイブという言葉が明文化され、2004年6月15日『e-Japan 重点計画－2004』では2005年までにデジタルアーカイブの有効活用を実現する成果目標が立てられた<sup>15</sup>。

IT 社会の基盤となる先端情報通信技術の開発では北米が圧倒的優位にある。こうした状況下 IT 社会での発展を模索する日本は同分野での競合ではなくコンテンツの活用に目を向ける。その一つが IT 社会での新たな産業の振興と経済的発展だけではなく、教育的価値と文化的意義が認められるデジタルアーカイブである。

日本ではデジタルアーカイブ構想の実現を目的に1996年4月に文化庁、経済産業省、総務省が支援するデジタルアーカイブ推進協議会（以下では、JDAA、とする）が発足する。日本において同構想が実現されてゆく過程は、政府機関の政策決定に関わった JDAA の活動に確認できる<sup>16</sup>。

デジタルアーカイブの法的問題に関しては JDAA が『デジタルアーカイブ権利と契約の手引き』、『契約文例 + Q&A 集』を発行した<sup>17</sup> 他、知的財産基本法（2002年法律第122号）、個人情報の保護に関する法律（最終改正2003年7月16日法律第119号）、コンテンツの創造、保護及び活用に関する法律（2004年6月4日法律第81号）、著作権法（最終改正2006年12月22日法律121号）が制定され、政府が目安とした2005年前後にはデジタルアーカイブに関わる法が整備される。

脱書面主義、脱対面主義である IT 社会の有様に倣い、デジタルアーカイブの提供方法のほとんどがインターネットを通じて、または CD-ROM、DVD 等の記憶媒体を介する非書面型、非対面型である<sup>18</sup>。そこに綴プロジェクトはデジタル化情報から合法的な、公的性格を持つ原寸大複製品を作成し、原品の代わりに一般展示するというコンテンツ活用法を展開する。IT 社会の構築とデジタルアーカイブ構想の実施は世界規模の動きであるが、こうした発想は欧米から提案されることとはなかった日本独自のものだ。

## 2. [風神雷神図屏風]

綴プロジェクトは2007年3月5日に発足するが [風神雷神図屏風] は2006年10月31日という一般公開期日にも明らかなように、綴プロジェクトの発足に先立ち製作される。記者発表会に試作を含めて展覧された<sup>19</sup> [風神雷神図屏風] は綴プロジェクトを代表する作品である。

## A. 製作

〔風神雷神図屏風〕の製作は2006年7月中旬より始まる。先ず京都国立博物館に保管されている原品を撮影した写真フィルムを同博物館より借用し、それをデジタル化し色校正を重ね高精細デジタル画像を製作する。視覚的情報の客観的、科学的保管、保存、再現に焦点を当てた高精細デジタル画像は特殊和紙に特殊インクを用い原寸大にて印刷された後、日本の伝統工芸を受け継ぐ京都の職人により原品と共に仕上げが施された。印刷された画像の上に金箔を施し、原品の雲の表現に見られる琳派の特徴であるたらし込み技法の箇所では金箔を透けるまで削り下絵を浮き出させることで微妙な濃淡が表現された。画像部分の完成後は二曲一双の屏風として表具が整えられた<sup>20</sup>。

俵屋宗達という唯一無二の存在が一回性のものとして創造した箇所（描画部分）、視覚的情報は伝統工芸等と同様の継承は不可能だ。こうした唯一無二の視覚的情報は同じく換えのない後世の修復また年月と環境からの影響（損傷、劣化、汚垢等）等の視覚的情報と共にデジタル化をはじめとする現代の最先端技術により高精度にて客観的、科学的に保存、保管、再現された<sup>21</sup>。

原品に用いられた岩絵の具、手すき和紙等の素材は自然物であるため同様の配合また組織のものは二つではない。そのため素材の質感等の原品に限定される情報が〔風神雷神図屏風〕に欠けることは致し方ない。一方でそれら技法、技術、素材は〔風神雷神図屏風〕の製作で用いられた箔工芸、表装といった伝統工芸と同じく俵屋宗達が活躍した当時はもちろん職人技として連綿と継承されていることから、それらに係る俵屋宗達の試みを今後、同様の原寸大複製品製作過程で試行し実証的に検証することは可能である。

こうした原品を再現可能な情報と置換可能な情報の融合体と捉え原寸大複製品を製作する綴プロジェクトの発想は、現在までのところ、原品に係る技法、技術、素材等が今まで継承されている伝統的な日本画に採用されるにとどまる<sup>22</sup>が、原品をいささかも欠損させることなく、原品誕生時の姿（視覚的情報、技法、技術、素材）をこれまでの各専門分野の研究成果を鑑み学際的、客観的、科学的に実証、検証する機会を設けるものだ、と本稿は指摘する。

原品に蓄積した情報は修復跡、汚塵であれ貴重な情報、原品の構成要素であり、原品の欠損を防ぐ観点からも、そうした皮膜を除去し原品誕生時の状態（視覚的情報、技法、技術、素材）を解析することは禁忌されている。しかしながら修理、修繕、修復を施しても物質である原品には現状維持若しくは劣化、消滅以外の選択肢はない。原品総体の保存、保管、継承は従来通りに進めるとしても、多くは数世紀と年月を経てきた原品の今後の保管、保存、継承を効果的に推し進めるため、また原品に係るアーカイヴ構築のためにも原品誕生の時点の状態（視覚的情報、技法、技術、素材）の解明は喫緊の課題である。綴プロジェクトにおける原寸大複

製品製作はこうした問題を解く実践であり、原品を未来に託すアーカイヴの一端なのである。

以上を念頭に〔風神雷神図屏風〕の展示について見ていく。

## B. 展示

本稿では、先ずデジタルアーカイヴのコンテンツ活用法の発表と共に〔風神雷神図屏風〕が日本国外で初披露された〈次世代への文化継承〉(2006年11月16日－12月6日。英語表記：Cultural Preservation for the Next Generation.)<sup>23</sup>を、次に北海道洞爺湖G8サミット(2008年7月7日－7月9日。以下では、洞爺湖サミット、とする)主会場ザ・ワインザーホテル洞爺(以下では、主会場、とする)の首脳会議場(主要8ヶ国と欧州連合のワークセッションが行われた地下1階の約210m<sup>2</sup>の大宴会場)での展示<sup>24</sup>を取り上げる。

### a. 〈次世代への文化継承〉

〔風神雷神図屏風〕の2006年10月31日建仁寺での完成披露の主調は《風神雷神図屏風》の原寸大複製品の最新作の披露であった<sup>25</sup>。〔風神雷神図屏風〕は完成披露後に建仁寺へ寄贈される前に〈次世代への文化継承〉に出展される。綴プロジェクトは〈次世代への文化継承〉での発表を第一の目的としていた<sup>26</sup>。

〔風神雷神図屏風〕はデジタルアーカイヴのコンテンツ活用法と共に2006年11月15日に開催されたJapan Society(1907年New Yorkに設立、全米最大の日米交流団体、非営利)<sup>27</sup>での講演会及びレセプション、それに引き続き大西ギャラリーにて開催された展覧会〈次世代への文化継承〉で披露される。

IT社会の基盤となる先端情報通信技術の開発で世界を先導する北米の、時代の動向に敏感な国際都市であるNew Yorkで開催された〈次世代への文化継承〉はJapan Societyと京都文化協会の共同主催だ。〈次世代への文化継承〉の趣旨は「日本美術に非常に関心の高いアメリカ・ニューヨークの人々に日本美術を身近に感じてもらい、更に日本美術の多くが集結する京都での文化財保存活動を通して、デジタルアーカイブ(電子保存)の大切さを伝えること<sup>28</sup>」であるが、端的に言えば、海外流出作品<sup>29</sup>を対象に含める綴プロジェクトを敷衍するためのプレゼンテーションだ。

2006年11月15日、Japan Societyを会場とした講演会及びレセプションへは美術館館長及び博物館館長をはじめとする学芸関係者、日本総領事館関係者、協賛関係者、各分野の学識者、約200名が招待された<sup>30</sup>。講演会は「文化財保護の大切さ、またそれが我々の未来にどのような意味を持つのか<sup>31</sup>」を主題に、司会者はRHIZOME(1999年設立、デジタルアートのオンラインアーカイヴを運営)<sup>32</sup>代表のLauren Cornell(1978-) 講演者は「現代日本画家<sup>33</sup>」

の千住博（1958-）及び2004年度の MacArthur Fellow（1975年設立、The John D. and Catherine T. MacArther Foundation、本部を Chicago に置く慈善基金団体、fellow 選出は1981年より）<sup>34</sup>である Heather Hurst（1975-、2004年9月に Archaeological Illustrator の資格で選出）の2名にて開催された。

〔風神雷神図屏風〕の他に展示された、同様に製作された複製品は「松鷹図」（原品は狩野派、元離宮二条城所蔵、重要文化財。複製品は襖3面を六曲一双の屏風に仕上げたもの。図3）、〔龍虎図屏風〕（原品は狩野山楽、妙心寺所蔵、重要文化財。複製品の仕様は原寸大、六曲一双。図4）、〔松林図屏風〕（原品は長谷川等伯、東京国立博物館所蔵、国宝。複製品の仕様は原寸の60%縮小、右隻のみ。図5）、〔四季花鳥図襖〕（原品は狩野永徳、大徳寺塔頭聚光院所蔵、国宝。複製品の仕様は原寸大、襖絵4面のうち2面『梅に水禽』のみ製作。図6）、〔龍門鯉魚図〕（原品は円山応挙、大乗寺所蔵。複製品の仕様は原寸大、2幅。図7）<sup>35</sup>である。

伝統的な日本画である原品の多くが流出している北米で開催された、講演と共にこうした作品群を事例として展示する〈次世代への文化継承〉は、既に見た原品の保存、保管、継承方法に新たな展開をもたらすデジタルアーカイヴのコンテンツ活用法を国際的に、芸術文化に関係が深く、影響力のある各界関係者に紹介する機会であった。

次に洞爺湖サミットの首脳会議場での展示について見ていく。

### b. 洞爺湖サミット

総轄の外務省は警備等々の理由から洞爺湖サミットの主会場でのアートディレクション（含配置、作品目録）に関する情報を公表していない。そのため本稿では、京都文化協会からの回答または新聞等の公式メ

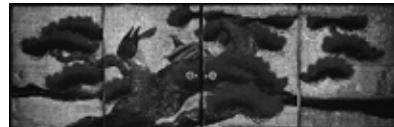


図3 松鷹図



図4 龍虎図屏風



図5 松林図屏風

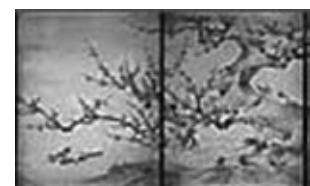


図6 四季花鳥図襖



図7 龍門鯉魚図

デイア上で扱われた内容<sup>36</sup>に沿って検証、考察を進める。

洞爺湖サミットではアートディレクションは外務省統轄の山本寛斎事務所管轄、会場演出はアートディレクターの戸田正寿（1948-）が手がける。アートディレクションについて戸田正寿は「各国首脳にわが国最高峰の芸術を見て頂き、心豊かな気持ちで会議が進むようにしました。“絵心事（えころじい）美術館”がコンセプトです<sup>37</sup>」と述べている。京都文化協会は綴プロジェクトでの製作品の出陳依頼を受理したのみである<sup>38</sup>。

洞爺湖サミットの特徴は地球温暖化をはじめとする環境問題を大きく取り上げたことだ。〔風神雷神図屏風〕は「自然の力を神格化した二神はエコロジーを体現する象徴として、地球環境問題を討議する場<sup>39</sup>」、首脳会議場に展示された。

洞爺湖サミット主会場では綴プロジェクトの〔風神雷神図屏風〕と〔松林図屏風〕に加え、〔龍門鯉魚図〕を除いた〈次世代への文化継承〉出展作品と〔豊國祭礼図屏風〕（原品は狩野内膳、豊國神社所蔵、重要文化財。複製品の仕様は原寸大、左隻のみ。図8）の計6点が展示された。その他に「絵画」「書」「写真」や造形物など様々な作品が展示<sup>40</sup>される。

洞爺湖サミット主会場でのアートディレクションは美術館を念頭に置いたとされる。しかしながら〔風神雷神図屏風〕等が「わが国最高峰の芸術<sup>41</sup>」と捉えられているものの展示品についての紙媒体資料は用意されず、複製品であることは作品紹介パネル上に記されるに留まる等<sup>42</sup>提供される作品情報は乏しく、首脳会議場での〔風神雷神図屏風〕と〔松林図屏風〕の椅子と卓子の背後という配置（図9、10）は作品鑑賞を考慮したものとはいわず美術館に期待される学術的配慮・教育的配慮は度外視されている。こうしたことから洞爺湖サミットでのアートディレクションのコンセプト、美術館が様々な貴重な作品を一堂に展示了した状態を慣例的に表現した例えであることは明らかだ。

では、洞爺湖サミットでの〔風神雷神図屏風〕等のデジタルアーカイヴを活用し製作した作



図8 豊國祭礼図屏風

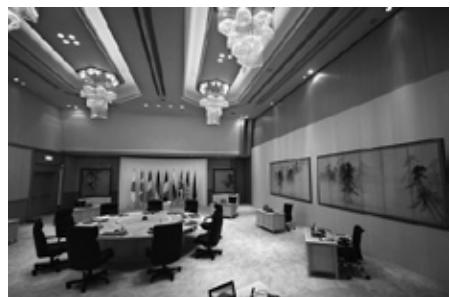


図9、10 主会場での展示

品の展示は何を意図し達成したのか。

首脳会議場の展示を見るように、来賓者が椅子に座した際の視線の高さに合わせる、屏風を平面的に壁掛けとして扱う等、洋間という環境との調和を優先した、そこに居る人を「心豊かな気持ち<sup>43</sup>」に導くことを第一義に作品を飾り付ける方法は美術館の展示ではなく室礼である。

屏風、襖という形式に示唆されるように、それらの展示における本分は請客饗宴等、晴れの日の儀式の際に調度類をたて室内を装飾する室礼にある。各国首脳という国賓を迎えるサミット会場での室礼には最高の品々が求められる。しかし保存、保管また警備<sup>44</sup>の観点から原品を用いた室礼はこれまで実現不可能であった。しかし綴プロジェクトの〔風神雷神図屏風〕をはじめとする複製品<sup>45</sup>の登場はこうした問題を解決し、臨機応変に環境に対応する屏風、襖といった原品の形式を生かす室礼を可能とする。洞爺湖サミットはそれを実現する絶好の機会であった、と本稿は指摘する。

綴プロジェクトではデジタルアーカイブのコンテンツ活用法として〔風神雷神図屏風〕が帰属先である建仁寺で展示される等、作家が想定した環境下で原品に代わり展示鑑賞が可能となること<sup>46</sup>が強調されるが、洞爺湖サミットでの展示を見るように、要点は伝統的な日本画に独特の室礼という役割、展示鑑賞の方法が可能となることだ。

原品の襖、屏風、衝立、掛け軸等の形式は室礼という独特の役割を示す。原品が室礼を担う場合、原品誕生時の視覚的情報、技法、技術、素材の検証はその室礼という役割の中での効果を念頭に入れなければならない。しかし従来、保存、保管の観点から美術館、博物館、収蔵庫等に納められている原品を調査する場合、作業時間、方法等に制約がある他、作家が想定した環境下、室礼の役割を担う状態で原品を観察する機会はほとんど望めない。そうしたなか登場した原品に想定される視覚的情報、技法、技術、素材を試用する綴プロジェクトの原寸大複製品は、それらの効果を作家が展示鑑賞を想定した環境及び状況下、室礼という原品本来の役割の中で実証的に検証することを可能にするものだ、と本稿は指摘する。

## おわりに

本稿では新たな背景、IT社会に登場した綴プロジェクトを代表する〔風神雷神図屏風〕を取り上げ、その原品の保存、保管、継承に係るアーカイブとしての可能性、独特の役割を検証、考察した。以下、本稿で明らかになったことをまとめておこう。

21世紀初頭、IT社会の地球規模での構築を背景に文化財や歴史遺産等の有形無形の創造物をデジタル化し、またデジタル製作品を保存活用することで新たな文化や知識の生成に役立てるデジタルアーカイブ構想が発足する。その一環である綴プロジェクトの特徴は伝統的な日本画のデジタル化情報から合法的な、工業的過程に加え日本の伝統工芸を受け継ぐ京都の職人が

原品と共に通する技法、技術、素材を施した原寸大複製品を製作し、一般に展示することだ。デジタルアーカイブ構想の実施は世界規模の動きであるが、こうした発想は欧米から提案されるることはなかった日本独自のものである。

〔風神雷神図屏風〕製作では俵屋宗達という唯一無二の存在が一回性のものとして創造した描画部分及び同様に換えのない後世の修復また年月と環境からの影響（損傷、劣化、汚垢等）等の視覚的情報は共に現代の最先端技術により客観的、科学的に保存、保管、再現された。原品を撮影した写真フィルムをデジタル化し色校正を重ね高精細デジタル画像を製作し、特殊和紙と特殊インクを用い原寸大にて印刷し、伝統工芸の職人の手により原品と共に通する技法、技術、素材、〔風神雷神図屏風〕製作では箔工芸、表装等を施し二曲一双の屏風として表具を整えた。

情報の保存、保管、共有により人類の文化遺産を未来に継承することがアーカイヴであり、アーカイヴにおける情報の正統性は、それと対応する唯一無二である原品の存在に保証されている。UNESCO による世界遺産（有形文化遺産）の認定基準にも確認できるように原品に真実性及び完全性が置かれているため原品の保存、保管、継承とは従来、原品の総体を保持し現状維持に努め劣化、消滅をできうる限り引き延ばすことに他ならない。しかし原品の多くが数世紀を経ている現在、原品の保管、保存、継承を今後効果的に推し進め、原品に係るアーカイヴを構築してゆくためにも原品誕生の時点の状態（視覚的情報、技法、技術、素材）を解明することは喫緊の課題だ。問題は、原品誕生以降原品に蓄積した情報は修復跡、汚塵であれ貴重な情報、原品の構成要素であり、原品の欠損を防ぐ観点からも、それら皮膜を除去し原品誕生時の状態（視覚的情報、技法、技術、素材）を解析することは禁忌であることだ。

そうしたなか登場した、原品に用いられ現代まで継承されている伝統的技法、技術、素材と現代の最先端技術を融合し原寸大複製品を製作する綴プロジェクトは、原品を欠損することなく、原品誕生時の状態（視覚的情報、技法、技術、素材）をこれまで蓄積してきた原品に係る各専門分野の研究成果を動員し学術的、客観的、科学的、国際的に実証、検証し解明する機会を設けるものだ。

加えて、綴プロジェクトのデジタルアーカイヴのコンテンツ活用法は、洞爺湖サミットでの展示に見るよう、屏風、襖という形式を取る原品を本来の役割、室礼において展示鑑賞を可能とする。作家は展示鑑賞の環境及び状況下での効果を念頭に原品を製作する。原品誕生時の視覚的情報、技法、技術、素材の検証は原品の室礼という独特の役割の中での効果を考慮しなければならないが、現行では保存と保管を第一義とするため原品をそれが想定された環境及び状況下で展示鑑賞することは多くの場合適わず、作業時間と方法にも制約がある。一方、原品に想定される視覚的情報、技法、技術、素材を試用し室礼を可能とする綴プロジェクトの原寸

大複製品は、それらの効果を作家が展示鑑賞を想定した環境及び状況下で実証的に検証することを可能とする。

原品が現在まで保存、保管、継承されてきた第一義の所以と存在価値は作家の創造が人々に与える感動である。アーカイヴはそうした原品に関して構築される。例えば作家が完成と見なし筆をおいた原品誕生時の状態、原品の元の視覚的情報、用いられた技法、技術、素材の解明は原品に係る多くの研究の原点である。重要なことは、アーカイヴの正統性は対応する原品の存在に保証され、原品の存在価値を証明するアーカイヴ構築は原品の保存、保管、継承を支持する相互関係にあることだ。誕生後数世紀を経る原品を多く抱える21世紀初頭、IT社会という新しい背景を得て登場したアーカイヴの一方で綴プロジェクトの原寸大複製品の、原品の保存、保管、継承に係る可能性、独特の役割は、以上に見た原品誕生時の状態を解明する機会を提供することで①現状維持以外の方策を立てあぐねている原品の保存、保管、継承の局面を開拓し、②アーカイヴ構築においては実証性を補強することである。

綴プロジェクトでは縮小サイズ及び形式を変更した複製品も製作しているが、それらについては原寸大複製品（含原品と同形式）という要素に焦点を当てた本稿では割愛した。尚、原品に想定される技法、技術、素材の同原寸大複製品製作での実施に関しては、本稿の議論の枠組みを超えるため示唆にとどまった。

## 謝 辞

綴プロジェクトに関する調査にあたり京都文化協会の大八木宏仁氏（当時）にご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

## 註

原品には《 》，複製品には〔 〕，展覧会には〈 〉を用いた。HP の最終確認期日（特に掲載したもの以外は2009年3月9日）は HP Address の後に掲載した。

- 1 美術館の開館日・開館時間、展示期間、照明の制限、展示ケース等。
- 2 例：矢代幸雄『サンドロ・ボッティチェリ』吉川逸治・摩寿意善郎監、高階秀爾・佐々木英也・池上忠治・生田圓訳 1977年 岩波書店
- 3 社団法人日本ユネスコ協会連盟「世界遺産活動」<http://www.unesco.jp/contents/isan/about.html>  
及び <http://www.unesco.jp/contents/isan/decides.html> 2008年4月11日  
「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」  
<http://www.unesco.jp/contents/isan/treaty.html> 2008年4月11日  
伊藤延男・濱島正士・岡田英男・服部文雄・樋口清治・新井英夫・金多潔・宮澤智士・村上訓一・大

- 西國太郎・安原啓示著、新建築学大系編集委員会編『新建築学大系50 歴史的建築物の保存』1999年  
彰国社 85-88, 91-93, 98-102, 373-375頁
- Cesare Brandi『修復の理論』小佐野重利監、池上英洋・大竹秀美訳 2005年 三元社 他。
- 4 手塚さや香「経た歳月までも忠実に——2年がかりの修理完了 俵屋宗達『鳶の細道図屏風』」2012年1月11日 每日新聞（夕刊）3面他。
- 5 岸桂子「科学や美術史 分野を超えた検証課題 光琳『紅白梅図屏風』に金・銀箔」2012年1月12日 每日新聞（夕刊）7面 他。
- 6 1990年代後半に日本で誕生した和製英語。  
artscape [http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/archive\\_words/](http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/archive_words/)
- 7 練プロジェクト <http://tsuzuri.kyo-bunka.or.jp/tsuzuri/top/>  
京都文化協会 <http://www.kyo-bunka.or.jp/zaidan/pdf/20070305>
- 8 西野嘉章編『真贋のはざま——デュシャンから遺伝子まで——』東京大学出版会, 2001年, 406-413頁 他。
- 9 山田獎治「文化財『デジタル複製』問題——本物は寺院から博物館へ——」2010年9月21日 每日新聞 7面  
野宮珠理「公開、管理にルールを——寺院の文化財 進むデジタル複製——」2012年21日 每日新聞 15面 他。
- 10 「風神雷神図屏風」の完成年月日は京都文化協会 <http://www.kyo-bunka.or.jp/> よりのご回答（2009年3月26日付）に準ずる。表具師の作業完了の期日が記録として残されていないため「風神雷神図屏風」が一般に初公開され期日をそれとした由。
- 11 高度情報化推進協議会『アーカイブのデジタル化と活用システムによる社会資本政策』高度情報化推進協議会, 1999年4月  
水嶋英治「諸外国におけるデジタル・アーカイブの動向と事例」後藤忠彦監『デジタル・アーカイブ要覧』教育評論社, 2007年, 124-128頁 他。
- 12 『高度情報通信ネットワーク社会形成基本法』同法第1章第2条 <http://www.kantei.go.jp/jp/it/kihonhou/pdfs/honbun> 2009年1月28日
- 13 首相官邸IT戦略本部 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/enkaku.html> 2009年1月28日  
IT戦略会議、第6回議事録次第、資料2（2000年11月27日）『IT基本戦略』  
<http://www.kantei.go.jp/jp/it/goudoukaigi/dai6/6siryou2.html> 2009年1月28日  
『高度情報通信ネットワーク社会形成基本法』<http://www.kantei.go.jp/jp/it/kihonhou/pdfs/honbun> 2009年1月28日 他。
- 14 「デジタルコンテンツ（\*2）」は情報の内容、中身を指し、特に静止画像や動画、音声等の素材を表す。
- 15 『e-Japan戦略Ⅱ概要』[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/030702ejapan\\_s.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/030702ejapan_s.pdf) 2009年1月28日  
『e-Japan重点計画2003』のII-5-③、24-32頁  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/030808honbun.pdf> 2009年1月28日  
『e-Japan重点計画2004』34-41頁 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/040615honbun.pdf>

2009年1月28日

- 16 JDAA は2005年6月30日に当初の目的を遂げ役割を果たしたとして解散する。  
JDAA（同HPは2005年7月1日に閉鎖）<http://www.dcaj.org/jdaa/>  
『JDAA のあゆみ』<http://www.dcaj.org/jdaa/explan/history.pdf> 2009年1月28日  
JDAA『デジタルアーカイブへの道筋』JDAA, 2000年2月。  
<http://www.dcaj.org/jdaa/public/pb003-02-1.htm> 2009年1月28日  
JDAA『デジタルアーカイブ白書』トランസアート, 2001年, 2003年, 2004年, 2005年
- 17 JDAA『デジタルアーカイブ権利と契約の手引き』JDAA, 2001年3月  
<http://www.dcaj.org/jdaa/public/kenri/kenri.html> 2009年1月28日  
JDAA『契約文例 + Q&A集』JDAA, 2003年3月 <http://www.dcaj.org/jdaa/qanda/index.html>  
2009年1月28日 他。
- 18 1996年発売 Corbis 社製 CD-ROM『Leonardo da Vinci』Musée de Louvre  
[http://www.louvre.fr/llv/commun/home.jsp?bmLocale=ja\\_JP](http://www.louvre.fr/llv/commun/home.jsp?bmLocale=ja_JP)  
LOUVRE-DNP Museum Lab <http://www.museumlab.jp/index.html>  
北海道遺産構想推進協議会 <http://www.hokkaidoisan.org/> 他。
- 19 京都文化協会, News Release (2007年3月5日)「京都国際交流財団とキヤノンが「文化財未来継承プロジェクト」(愛称:綴プロジェクト)を発足 日本の貴重な文化財をデジタル技術により保存し後世に継承」<http://www.kyo-bunka.or.jp/zaidan/pdf/20070305.pdf>  
デジカメ Watch (2007年3月5日)「キヤノン、大判プリントによる文化財複製プロジェクトに協賛」<http://dc.watch.impress.co.jp/cda/accessories/2007/03/05/5729.html>
- 20 金箔には古色が施されたが、これは工芸技術上の効果であり贋作に用いられる時代を呼びたように見せかける施術とは異なる。  
京都文化協会, News Release (2008年11月1日)「建仁寺の国宝「風神雷神図屏風」高精細複製品を完成披露」<http://www.kyo-bunka.or.jp/zaidan/pdf/20061101.pdf>
- 21 キヤノン：ニュースリリース (2008年2月13日)「キヤノンが世界最大規模のデザインの祭典「ミラノサローネ」に初めて参加 大判プリントとデザインの融合によるデザイン展を開催」  
<http://www.canon.co.jp/pressrelease/2008/p2008feb13j.html> 2009年4月12日  
NIKKEI DESIGN (2008年4月18日)「キヤノン、ミラノサローネで大判出力機をアピール」  
<http://blog.nikkeibp.co.jp/nd/news/2008/04/173482.shtml> 2009年4月12日 他。
- 22 例：Galleria degli Uffizi では日立製作所と共同でデジタル技術を駆使し Leonard da Vinci (1452–1519) による《Annunciazione》(1472–75年頃, 木製パネル, テンペラ, 98×217cm。) 等の原寸大複製品を製作したが従来の写真図版と同様の、研究のための二次資料という位置づけに留まる。
- 23 〈次世代への文化継承〉関連情報は同展チラシを参照のこと。  
京都文化協会, News Release (2006年11月1日)「建仁寺の国宝「風神雷神図屏風」高精細複製品を完成披露」<http://www.kyo-bunka.or.jp/zaidan/pdf/20061101.pdf>  
Japan Society: 333 East 47th street, New York, NY 10017 <http://www.japansociety.org/> 2009年3月26日

- 大西ギャラリー /Onishi Gallery: 515 West 26th Street, New York, NY10001  
<http://www.onishigallery.com> 2009年3月26日  
RHIZOME <http://www.rhizome.org/> 2009年3月26日  
MacArthur Foundation <http://www.macfound.org/> 2009年3月26日
- 24 首相官邸北海道洞爺湖サミット <http://www.kantei.go.jp/jp/summit/index.html> 他。
- 25 例：大塚オーミ陶業株式会社 <http://www.ohmi.co.jp> が陶板製の原寸大複製品を制作している。  
京都文化協会、News Release（2006年11月1日）「建仁寺の国宝「風神雷神図屏風」高精細複製品を完成披露」<http://www.kyo-bunka.or.jp/zaidan/pdf/20061101.pdf>
- 26 デジカメ Watch（2007年3月5日）「キャノン、大判プリントによる文化財複製プロジェクトに協賛」<http://dc.watch.impress.co.jp/cda/accessories/2007/03/05/5729.html> 2009年4月2日
- 27 Japan Society <http://www.japansociety.org/>
- 28 〈次世代への文化継承〉展チラシの説明書きより。
- 29 北米には日本の美術作品の多くが流出した。The Metropolitan Museum of Art 所蔵の尾形光琳《八橋図屏風》及び狩野山雪《老梅図襖》，Seattle Art Museum 所蔵の狩野孝信《琴棋書画図》他。
- 30 招待者の氏名は非公表。
- 31 〈次世代への文化継承〉展チラシの説明書きより。
- 32 RHIZOME <http://rhizome.org/artbase/about/>
- 33 〈次世代への文化継承〉展チラシの説明書きより。
- 34 MacArthur Foundation <http://www.macfound.org/>
- 35 出展品目及び各複製品の仕様については京都文化協会の大八木宏仁氏（当時）よりご教示頂いた。
- 36 首脳会場内の様子は、会場準備が整った時点（2008年7月4日）で主要メディアを招待する形式にて公開された。[風神雷神図屏風]についての記事は作品概要を紹介する内容以外は確認されておらず、海外メディアが取り上げた記事は確認されていない。
- 37 室蘭民報ニュース（2008年7月5日朝刊）「北海道洞爺湖サミット議場公開、美術館をイメージ」  
[http://www.muromin.mnw.jp/muromin-web/back/2008/07/05/20080705m\\_01.html](http://www.muromin.mnw.jp/muromin-web/back/2008/07/05/20080705m_01.html)
- 38 京都文化協会京都文化協会の大八木宏仁氏（当時）よりご教示頂いた。  
読売新聞（2008年7月17日、朝刊13面）「記者ノート『サミット見つめた「風神雷神」』」
- 39 読売新聞（2008年7月17日、朝刊13面）「記者ノート『サミット見つめた「風神雷神」』」
- 40 京都文化協会京都文化協会の大八木宏仁氏（当時）よりご教示頂いた。
- 41 読売新聞（2008年7月17日、朝刊13面）「記者ノート『サミット見つめた「風神雷神」』」
- 42 京都文化協会京都文化協会の大八木宏仁氏（当時）よりご教示頂いた。
- 43 読売新聞（2008年7月17日、朝刊13面）「記者ノート『サミット見つめた「風神雷神」』」
- 44 デジタルアーカイヴによる複製品の単価は千万円単位とされ安価とはいえないが、原品の金額に換算不可能な価値とは比較にならない。
- 45 偽、贋作ではない複製品。
- 46 紹介プロジェクト <http://canon.jp/tsuzuri/overview.html> 2011年9月29日  
京都文化協会 <http://kyo-bunka.or.jp> 2011年9月29日